大聖人の教えは思想に近いようにおもいますが宗教としてのこしたのはなぜですか

宗教も思想も見方によっては同じものではないでしょうか
どんな宗教でも必ず本仏が掲示されまが、それはおおくの場合、信仰の対象であると同時に思想できな側面を備えてい場合がおおくあります。なんの理由もなしに本仏の掲示が行われることはありません。本仏に託して思想的表示をしているわけです。本仏が何を教えているのかよく理解をする必要があるのと思います。実態のない本仏や神をかかげいるものは宗教とは呼べないとおもいます
大聖人は自らは一宗一派の祖ではないといって一派を構えることはしませんでした。大聖人の考えは一宗一派に偏集するものではなかったからです。いまのような形になったのは宗祖にたいする後の弟子の報恩・感謝の気持ちによるものではないでしょううか。
それはまた、宗教の力を借りて信頼というものを、をさらに深く価値あるものに昇華させていくということもあったのではないでしょうか

宗教分と宗旨分ということについて教えて下さい

宗旨分とは、その宗派の主要な趣旨のことで、　思想てきな部分をいいます
宗教分というのは、その宗旨をうけて宗教としての形の部分をさして言います。
大石寺の宗旨は、魂魄のうえに信頼が説かれていることです。しかも民衆はこの信頼の玉を受持によって既にもっているとし、釈迦のいう修行は満ちているとしています。
修行が満ちていれば当然、この世に一人の落伍者もなく、死後に地獄も有りません。
宗教分はその趣旨を伝える為によういされたものです。　本尊、題目、客殿、御影堂、丑寅勤行、、観念文などで宗教としての形を整えています
その一つ一つが探ればに宗旨を鮮明にすることができます。
信頼をみつけられるようになっています。

りこ

所詮

図現・顕現された本尊は日蓮の魂といはれますが、何を意味していますか、また、お題目はまにをいみしていますか。

日蓮の魂とは信頼の事です。本尊も題目もまた同じく信頼を意味します
今の宗門や正信会・学会では日蓮の魂というと日蓮の生命と考えているようですがこれはかなり無理があるとおもいます。生きている人間の生命を一幅の紙に収納させることはできません　。
大聖人の法門はすべて師弟子の法門のうえに考えられていますから、この本尊も魂魄の上にかんがえなくてはなりません。魂魄のうえに説かれた本尊ですから当然、　仏教の本尊とはがってきます。、一口にいうなら信頼ということです　一幅の曼荼羅のなかで上行菩薩と不軽菩薩が師弟子をただして信頼を示しているわけです。また沢山の神や菩薩、民衆が共に譲りあっ信頼を成就しているともいえます。御本尊の事を功徳聚などとよぶことが有りますが、これも本尊の信頼の力をそう呼んだものです。題目も同じ意味です

仏教と仏法は同じものだと思って来たのですが、違うと聞きました。どの様な違いがあるのですか

仏教といってもその種類は非常におおいのですが、一言でいうなら釈迦の教えということです。また釈迦の教えの流れをくむものの全部の総称でもあります
。仏教も仏法も生老病死・愛別離苦という人生の苦しみをいかに乗り越えるかという、共通の目的を持っていますが、その方法が大きく違っています。　仏教では先ず修行を積んで悟った者が（釈迦）、その方法を人々に示して、民衆はその教えられた修行を積み重ねることによって救われるとします。教による救済です。　これに対して仏法では法による救済をときます。法というのは民衆一人一人が本来備えている信頼の事で、この民衆所持の信頼で民衆を救おうとしたのが仏法です。本仏・本尊・戒壇・題目・など仏教とおなじ言葉を使っても仏法では解釈におおきな違いがあります。仏教との混乱に注意しなければなりません。

受持ということばがよく使うはれますがどういう意味ですか

五種の妙行の一つで受持・読・誦・解説・書写のひとつです　受持という意味は堅く信をたもつということです。仏教ではこの五種類を一つひとつ修行することで悟りを開いていくことが出来るとされています。一方、仏法では初めの受持の中に後の四つも含まれるとし、しかもそれらの修行はすでに完了ずみで、はじめから民衆の魂魄の上に受持されているとしています。積み重ねた修行の結果、成道するのではなく初めから受持により成道ずみだとしているのです。この受持は魂魄のうえに考えられることで時間を超過したところで考えられてます。この魂魄の上の受持によって釈尊全てのおしえを完了しており、もはや釈尊と同等の境地であり、釈尊の説く修行の必要の無いことをいみしています。
信、不信に関係なく、でに修行も満ちた民衆に来世の地獄はあろうはずがありません。しかもこの受持は同時に世間の信頼の受持も含まれています。

一言摂尽の題目についておしえてください

大聖人が説いた題目の事です　魂魄の上に考えられている題目です　信頼を確認してから感謝の上に唱える題目のことです
題目というのは教えのすべてを一字におさめたものです
おしえのすべてが一言に凝縮されているといっても過言では有りません
大聖人の題目は妙法蓮華経と南無妙法蓮華経の二つの題目を重ねて同時に唱えています。五字七字の妙法です。五字七字で互いに切磋琢磨し師弟子の法門を成じています。この師弟子の法門の上に成じたものが、世間でいえば信頼というものです・題目はこの信頼を教える為の表示です。この信頼を確認した上で唱える題目を一言摂尽の題目といい、一回となえるも、千回唱えるも同じ事です、ともに信頼の上に感謝の気持ちを持って唱える題目です。数は関係有りません
千遍万遍の題目を神経を集中して一回にまとめて唱えようということでは有りません。

事行の法門とはどういうことをいうのですかまた、山法山規と同じですか

事に対して理という言葉がありますが、理とは悟りのことです。釈迦仏教では民衆はまだ悟りを開いていないため、理を中心に考えます。しかし、大石寺では民衆はすでに受持によって成道ずみとかんがえていますから悟りはすでに手中に有り、必要なのはその確認方法だと考えまています、事行とはその確認方法の事です、戒壇の本尊・御宝蔵・客殿・御影堂・丑寅勤行　など山内すべてのものが成道確認のためにもうけられた、事行の法門です。またこれらは山法山規ともいわれ文字をつかわず法門を伝えています。いはれを探れば説明は必要ないようになっていいます。事行の法門も山法山規も同じものです。
いずれも信頼を取り出す手掛かりです。

ご本尊は宇宙の生命ではないのですか

本尊の正体は信頼です。　　生命では有りません
今の宗門では宇宙の生命とかんがえているようです。創価学会の生命論もおなじ思想です自分の生命はどこかで宇宙の大霊と結ばれているとかんがえています。この考えは紀元前四、五世紀のころすでにユダや夕教で考えられたもので砂漠の遊牧民のなかで生まれたものです、かれら遊牧民は常に外敵ひさらされ、例え親、兄弟でも信用できませんでした、そうした不信のひとびとは強力な一神教のしたに連帯するしかなかったのです。力による支配です。欧米思想の根源の所です　　生命論は不安と不信を基礎を置く欧米思想そのものです。これに対し宗祖は信頼を説いて対抗しているのです

宇宙の大霊
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

塔婆供養は法門と違うのですか

違います。
塔婆供養は宗祖の法門では有りません
辞典によると、卒塔婆供養というのがただしいようです、　本来は釈迦の遺徳をたたえるために建てたものですが、いつのまにか、　死者に対する供養となって来ました。
つまり「死んだ家族や友人があの世で救われていないかもしれないから」救ってあげようと言う事なのです。しかし宗祖の教えでは、　すべての民衆は受持によってすでに成道ずみであり、死後、悪道に落ちることはないとしています。塔婆をたてるのは宗祖の説を向こうにまわしてケンカを売るようなものです。むかしからずっと大石寺では塔婆をたてませんでした塔婆を建てるようになったのは法門がかわった証拠です。
死後の墮獄を認めたことになります。

法傍はどういう行為、考えを言うのですか

信頼をうしなうのとです
信頼を失う行為のことです　信頼に反する考えのことです
具体てきには、色々アリマスガが、ご自分でもお考えください。
たとえば　なんといっても横綱は信頼の出処である法門のねじまげ。次に民衆に立ちはだかる。愚痴をいう。努力をしない。独断でする。意地悪をする。相手を認めない。喧嘩をする。信用しない。放任する。譲りあわない。人のせいにする。　そのた色々
この反対は信頼の世界だヨ

大聖人は死後の事をどのように説いていますか。死後に地獄はあるにですか
来世は有るのですか

もし死後があるとしても死後に地獄に落ちるという事は有りません
信、不信にかかわらず、成仏するための修行は受持によって既に完了しています。　修行の満ちているものが地獄に落ちるはずが有りません。来世があるのか、無いのかと言うことは一切触れられていません、宗祖のおしえはい信頼の中に現世の寂光土を感得しようというものです。死後の事は、各々の判断によるところです
死んだ後また今世に生命をもって生まれ出るものなのか、どうか、それはだれもわかりません。それよりは、いま、生きていることの重要性にめをむけて、死して後の事は天にまかせるしかありません。

御書の中に多くの偽書があるとききましたが、どういう御書がありますか
それは何の意図があったのですか

三大秘法抄・御義口伝・法華初心成仏抄　種々御振舞御書、盂蘭盆御書　生死一大事血脈抄
日興上人　当体義抄　三世諸仏総勘文

宗祖の教えは全て魂魄の上に考えられています　思想とみることも出来ます
戒壇も題目も本尊も本来形のないのが信条です。教団をかまえてお金儲けをするには法門をかえなければはりなせん。そのためつぎつぎと新しい御書がつくられたのです
ですから真筆で無いものを真筆と称してつかっているわけです。